

バルセロナの青い空

「あなた誰なの？」

アニタ・ノールが隣のレーンの少女にこう言った。1992年バルセロナ・オリンピック200m平泳ぎ予選のゴール直後のことだった。3レーンを泳いだ少女は4レーンのノールにタッチの差まで追い詰めた。

ノールは世界記録(2分25秒35)保持者でオリンピックの金メダルは当然視されていた。予選でノールは他の選手の力量を確かめるため、余裕を持ちながら泳いだのだが、隣のレーンの少女がゴール手前から猛烈な追い込みを見せ、あやうく予選1位通過を奪われるところだった。大差で予選を通過するつもりが、タッチの差で勝つという予想もしないことが起こり、さらに追い込んできたのは見たこともない日本人のあどけない顔した少女だったことに驚き、とっさに出たのが、「あなた誰なの？」という言葉だった。

岩崎恭子は静岡県沼津市で三姉妹の次女として産まれた。水泳を習っていた姉の影響で水泳を始めた恭子はみるみる上達し、小学6年のとき全国大会で優勝している。中学2年、13歳のときバルセロナ・オリンピック選考会で2位となり出場を果たした。

開会式直前の7月21日に14歳になったばかりの恭子は小柄(157センチ)で、オリンピック直前の世界ランキングも14位と低く、マスコミも全くノーマークだった。自身も「決勝に残れたらいいと思います。」と語っている。そんな恭子は予選二位という結果に自分でも驚いた。「泳いでたらあ、隣の人にどんどん追いついちゃってえ、ビックリしました。」と予選後のインタビューで無邪気に話している。隣が世界記録保持者のノールだとも知らなかったのである。恭子にとってノールはただの「隣を泳ぐ人」だった、この気楽さが誰も予想しなかった結果をもたらすことになる。

決勝レースの空は快精だった。バルセロナのオリンピックプールは今では珍しくなった屋外プールで、スタート台に立つと正面に大きな電光掲示板が見え、その上には青い空が広がっていた。ノールは予選で幼い無名の少女にゴール手前で追い込まれたことで慌てていた。「予選は少し油断しすぎたわ。今日は最初から飛ばして先行逃げ切りでいこう。誰も私のスピードにはついてこれないはず。」決勝は4レーンに予選一位のノール、5レーンに予選二位の恭子だった。

「とにかくこの子にできるだけ差をつけて、追い上げを諦めさせなくちゃ。」
「テイク・ユア・マーク」スタータの声が響いた。号砲が鳴ってノールは飛び込み、いつものレースのように浮かび上がるともう頭一つリードしていた。前半からグングン飛ばし、トップで50mをターンした。恭子は5位で折り返した。中間点の100mのターンでもノールはトップを守った。「これだけ差がつけば、あの子も追ってこないわ。」しかし、ノールは力を緩めなかった。予選の苦い経験があったからである。ノールは恭子が150mのターンでは0秒98の差に追い詰め2位になっていたことには気付いていない。残りは25m。このまま行けば勝てる。そう思った瞬間ノールは右側5レーンの水しぶきを感じた。「何？」まさかと思って右を見ると昨日の少女が並んでいるではないか。ノールは慌てた。しかし、力を入れれば入れるほどストロークが伸びない。「どうして？」

恭子は予選で2位になり、しかもそのタイムがこれまで9年間破られていなかった長崎宏子が持つ日本記録2分29秒65を2秒近く更新する2分27秒78の日本新記録だったこともあり、これで日本に胸を張って帰ることができる。恭子の気持ちの中で、オリンピックは終わっていた。その気持ちを見透かしたかのようにコーチから、「恭子ちゃん、よくやった。でも、もう一本（決勝）あるからね。」と言われ、そうまだ決勝があるんだと我に返ったが、決勝のレース前、不思議なくらい緊張感がなかった。予選で日本新記録を出したことで、決勝は「おまけ」みたいなものに思われ、メダルのことなど考えてもみなかった。「屋外プールが私に合っているのかも。体調はいいし、予選のように泳ごう。」そう言い聞かせてスタート台に立った。

「おかしい。」残り25m、ノールから冷静さが失われていた。力めば力むほど隣の少女が前に進む。ゴール板がこれほど遠く見えたことはなかった。

恭子は150mまで前を泳ぐノールの姿がよく見えなかった。ゴーグルをしていなかったからである。いつだったか、レースのスタートで飛び込んだ瞬間、ゴーグルが水圧でずれたことがあり、ゴーグルがずれたまま泳ぐのは気が散るし、抵抗になるし、何より前方がよく見えない。それ以来練習では付けて泳いだが、レースでは外して泳ぐようになった。ゴーグルをしていなくてもうっすら前方が見えるし、却ってはっきり見えない方が泳ぎに集中できた。だからノールが自分より前を泳いでいることは分かっていたが、どのくらい前なのか分かっていなかった。150mのターンを終えたとき、左側4レーンのノールの姿が目に入ってきた。「あれ、こんなに近くにいるんだ。」予選の疲労もなく身体が軽かった。「もしかして、いけるかも。」予選の泳ぎを思い出しながら、恭子は予選より

ストロークを長くすることにした。ひと掻きごとにノールに近づいていき、残り 25 m で並んだ。

「逆転した！やったっ！ 勝った、勝った！やった、やったあ…！」
実況するアナウンサーも興奮していた。25 m を夢中で泳ぎきった恭子は 0 秒 23 の差でノールをかわし金メダルを取った。一方、ノールは中国のリン・リにもかわされ銅メダルに終わった。恭子のタイム 2 分 26 秒 65 はオリンピック新記録であり、もちろん日本新記録でもあった。

プールから上がった恭子は観客席の方を見た。澄み切った青空が眩しかった。両親が応援にきているはずだったが、見つけられなかった。そのときインタビュワーが来た。「どんなお気持ちですか？」恭子はこう答えた。

「今まで生きてきた中でえ、一番幸せです。」

決勝の日、岩崎恭子は 14 歳と 6 日だったが、これは今も破られていない日本人選手の最年少オリンピックのメダル獲得記録である。